

別記第2号様式

平成15年度中間評価調査書

機関名 アイヌ民族文化研究センター

整理番号	2	研究課題名	沙流川流域の「神謡」の音楽構造と歌唱様式についての調査研究			
事業区分	重点領域・一般試験等 一般試験	研究区分	研究	試験	調査	分析
共同研究機関 (協力機関)						各種施策等との関連性 第3次北海道長期総合計画 大項目：だれもが安心して暮らせる住み良い社会を形成する。 中項目：アイヌの人たちの民族としての誇りが尊重され地位の向上が図られる社会の実現 目 標：アイヌ文化の保存振興とアイヌの人たちに対する理解の促進
研究期間及び 所要見込額(千円)	11年度～16年度	前年度以前	当年度	翌年度以降	全体所要額	
		347 (347)	177 (177)	177 (177)	(一財) 701 (701)	
研 究 の 概 要						
- 研究背景 アイヌの伝統的な口承文芸には旋律にのせて語るものがあるが、それがどのように行われるかについて音楽学の立場からの研究は少ない。また口承文芸を含めたアイヌ音楽全般における旋律の構造や歌唱様式、音楽的な傾向や規則性の詳細も今のところ研究途上にある。 - 研究目的 沙流川流域を対象に既刊の音声資料などを用い、口承文芸の一ジャンルである「神謡」について旋律の構造、傾向、規則性などを明らかにする。 - 研究内容 既刊の音声資料(調査対象は40曲、うち35曲が比較検討の対象)を用いて沙流方言話者による神謡を聴取し、各曲の特徴を比較検討する。 - 年次別目標 平成13年度まで：方法論の検討、および仮説の提示。 平成14年度：既刊の資料について、それぞれの曲の旋律全体を形成する単位となっている要素、リズムとの対応関係、各演唱者の発声の特徴などを中心に分析・整理。他機関の所蔵する音声資料(未公開)の調査。 平成15年度：既刊の資料について、前年度と同様の作業。他機関の所蔵する音声資料の調査。 平成16年度：既刊の資料について、前年度と同様の作業。全曲を比較検討しての最終的とりまとめ。 - 研究計画の適切性 目標、期間、必要経費とも妥当である。						
直近の研究課題評価結果 平成13年度 中間評価 【自己評価】 A・B・C 【総合評価】 A・B・C						
研 究 の 進 捗 状 況						
- 研究計画に照らした進捗状況・目標達成度など ・これまでに15曲の曲の旋律全体を形成する単位となっている音高線や、歌詞とリズムの対応関係や、各演唱者の発声の特徴などを中心に、曲ごとの特徴を抽出し整理した。 ・参考資料として他機関の所蔵するアイヌ音楽の音声資料(とくに神謡としての特徴をもつものを中心に)を聴取した。 ・採譜にやや手間どる曲などがあるが、全体としては、ほぼ計画どおりに進んでいる。 - 年次別実績 平成11年度：旋律構造の分析方法の検討(センター紀要6号に掲載) 平成12年度：歌唱様式の分析方法検討(第433回東洋音楽学会例会で発表) 平成13年度：音楽構造についての検討と仮説の提示(センター紀要8号に掲載) 比較検討資料のリストアップ 平成14年度：既刊の資料より15曲の採譜・分析作業 参考とする他機関資料の調査						
進捗度・目標達成度 a・b・c						
今 後 の 見 通 し						
- 研究開始後の事情変更の有無 なし - 研究手法・資源配分の見直しの必要性 なし - 期待される成果とその実現可能性、成果の有益性・活用可能性 ・沙流川流域の神謡の音楽的特徴と歌唱様式を解明することができる。 ・効率的な伝承や普及の手法に応用できる。 ・神謡以外のジャンルのアイヌ音楽の研究に活用できる。						
期間の妥当性 a・b・c 経費の妥当性 a・b・c 実現の可能性 a・b・c 活用の可能性 a・b・c						
【自己評価】 A・B・C	【意見】 神謡についての音楽的研究は口承文芸の語り方や歌謡の歌い方の解明につながるものであり、効率的な伝承や学習に役立つことから、引き続き取り組む必要がある。					
【総合評価】 A・B・C	【意見】 アイヌの伝統的な口承文芸の一つである「神謡」について、既存の音声資料の音楽構造の分析、比較検討を行うことにより、沙流川流域の「神謡」の音楽的特徴と歌唱様式の解明や効率的な伝承や普及の手法への応用に繋がることから引き続き優先的に取り組む必要がある。					

(A) 今後十分な研究成果が期待でき、優先的に取り組む必要がある
 (B) 今後一定の研究成果が期待でき、継続して取り組む必要がある
 (C) 今後の見通し等に問題があり、中止を含めた抜本的な見直しが必要である

(a) 極めて高い、適切である
 (b) 高い、概ね適切である
 (c) 低い、改善の余地がある